

五百川三十三観音の由来一考（下）

長岡 信悦

石橋太郎なる者については、長岡幸助の著書「朝日岳の歴史をたずねて」において鉦山に関わる白倉騒動の首謀者として登場し、夏草の住人であったとしている。またこの騒動は天明年間（一七八一〜一七八九）に起きたのではないかとしており、もう一人の首謀者も宮宿村長岡某とあり、待神上人（たいじょうしようにん）は出て来ない。また、この事件の処理では、石橋太郎は斬罪に処されたとあり、前記の縁起とは違っている。また、白倉騒動については、「朝日町史上巻」において、天保三年（一八三二）実際に起こったことであり、木川新道（朝日山新道）に関する事件であり、直接鉦山に関わるものではないとされている。

待定上人については、大江町の松田進氏によると、貞享二年（一六八五）蔵増（天童市）の生まれで、三十四歳の時に出家し、出羽三山・奥州・関東を廻り修行苦行している。その苦行とは、「頭灯・掌灯・指灯」といって、頭や手や指に火を灯し焼くことであったり、大江町の用では「水垢離（みずごり）」として、最上川の水中に杵をつくり、水中から七日間念仏を称えた

といい、用村と和合村では庵を造り、窮屈な箱に入って百日間念仏を称えるなどの苦行をして五年間も滞在したと言います。この様な苦行は皆の罪（罪業）を償う（替わりに請け負う）ためにしたもので、人々はその苦行を見て信心の心を奮い立たせたという。上人は享保十六年（一七三一）、置賜の亀岡文殊において、入定窟に入り念仏を称えながら往生したのですが、その前に、自ら刀で両眼を取り、肉片を切り取り、八十七ヶ所へ送ることを遺言している。その中の一つが大江町の藤田に届けられ、建てられた供養の石塔が朝日学園入口にある。従って、「村報いもがわ」にある「待定上人入定の跡」というのは、この石塔のことを標示していたのではないかと思われる。

以上、少ない史料ではあるが、最初の縁起に直接つながるものは見当たらず、五百川三十三観音の成立については、「朝日町史上巻」にもあるが、明治以降に下るものであり、白倉騒動に関わる石橋太郎や当地域に所縁のある待定上人の登場等に合わせて、江戸時代の成立としたのではないかと考えられるのである。

今回、五百川三十三観音の調査をしてみて、江戸時代の文献史料等には「五百川三十三観音」という語句は見当たらなかった。また、別当を務めておられるお宅や寺院にも五百川三十三観音についての古い史料等は無かったが、三十三番札所雪谷の鈴木さん宅に、参詣者に配ったという「五百川三十三所第三十三番、雪谷村」のお札があった。そのお札の版木も保存しており、版木の裏には「鈴木忠蔵、明治貳拾年三月廿日」と明記してあることから、明治二十年には五百川三十三観音が成立していたことが分かった。



■長岡 信悦

昭和 25 年 (1950) 常盤生まれ。昭和 47 年山形大学教育学部卒。その後、山形県公立学校教員として西村山管内の小中学校に勤務し、平成 22 年宮宿小学校長で退職。現在は NPO 法人朝日町エコミュージアム協会理事長、朝日町町史編さん専門員・文化財保護委員を勤める。



五百川三十三観音 第 33 番札所 雪谷